№をクリック

令和元年度　実践研究奨励援助事業　採用校・研究主題等一覧

■　学校経営研究部門

No.	園名・校名	園長名・校長名	研究者	研究主題
【小学校・小中学校】				
<01>	学校法人自然保育学園 風と緑の認定こども園	髙須　　良		子どもが遊び込める環境の充実をめざして ～主体的・対話的で 深い学び（遊び）のための環境づくり～
<02>	宇都宮市立石井小学校	髙橋　　司		学校・地域　元気プロジェクト
<03>	宇都宮市立陽東小学校	手塚　　浩		学校教育における東京オリンピック・パラリンピックの啓発およびカリキュラムマネジメントの視点による授業改善
<04>	鹿沼市立南押原小学校	近藤　明子		学力向上を目指した学校体制での組織的・継続的な取り組み
<05>	鹿沼市立楡木小学校	永山　彦三郎		自尊感情と自己有用感を育む学校経営
<06>	日光市立三依小・中学校	福田　　稔		小中一貫教育校における、 やる気と自身を育む児童生徒の育成 ～地域と共にある学校づくりを目指し、地域との 関わりを強化した教育課程の工夫と改善～
<07>	栃木市国府南小学校	塩田　裕子		学校を核としたコミュニティ・スクールの推進 ～組織マネジメントを生かした 計画づくりに焦点を当てて～
<08>	那須町立東陽小学校	深谷　雅明		「居がいのある学校」を目指して ～児童を認める活動・児童の意欲を高める 動の実践をとおして～
<09>	佐野市立吾妻小学校	中村　徳幸 （現　足利・協和中校長）		地域と共に歩み続ける学校を目指し ～地域の財産「自然・文化・人材」を活用した 活動をとおして『郷土愛』を育む～
<10>	足利市立富田小学校	佐々井　信子		義務教育9年間を見通した系統的、 連続性のある教育内容・指導法の工夫 ～分離型小中連携を通して～
【中学校】				
<11>	日光市立足尾中学校	原口　真一		右脳を鍛える ～活動意欲の喚起を目指して～
【高等学校】				
<12>	県立真岡北陵高等学校	押久保　徹		持続可能な地域社会を北陵生の手で

戻る

学校経営研究　＜01＞

研究主題　子どもが遊び込める環境の充実をめざして

～主体的・対話的で深い学び（遊び）のための環境づくり～

園　名　　学校法人自然保育学園　風と緑の認定こども園

園　長　　高須　良

１ 研究目的

「遊び」を中心とした子ども主体の保育を実践している本園。園児は、毎日、登園から降園まで、自らが選択した「遊び」を自主的・主体的に展開しているが、それが十分に遊びこんでいるものかどうかと問われるならば、さらに深い学び（遊び）の場面をつくっていく必要性を感じている。そこで、本研究では、子どもが遊び込める環境の充実を図ることで、子どもが主体的・対話的で深い学び(遊び)ができるようにしていきたいと考えた。

２ 研究内容

①「遊び込む」の定義づけ

どんな状態が遊び込んでいる状態なのか。

②「遊び込む」ための環境づくり

どんな環境が子どもの「遊び込む」活動のバックグラウンドとなるか。

〇物的環境づくりの工夫

〇人的環境づくりの工夫

③記録の仕方と記録に基づいた討議のあり方（ドキュメンテーションによる資料収集と話合い）

④一日の振返りの場としてのミーティングの位置づけと話合いの充実

３　研究成果

①遊び込むための要素として、「没頭」「試行錯誤」「協同」等が考えられ、その視点で「遊び込む」姿を観察することにより、より焦点化して子どもの遊びを捉えることができるようになった。

②〇物的環境づくり…教材・教具の配置等の工夫により、子どもの遊び心を刺激し、遊びがいろいろな方向に発展していった。

【具体例】

本園職員（デザイナー）の作成した本園オリジナルの切手（10 種類）を園児に提供することにより、切手を買うためのお金作り、封筒づくり、郵便屋さんごっこ等へと遊びが発展していった。

【手づくりの切手から活動が様々に発展】

〇人的環境づくり…保育者がニアネスとディスタンスを使い分け、遊びに集中している子どもの活動を中断させないよう、時に見守り、時に遊びのヒントを示す等の声掛けをすることにより子ども主体の遊びが展開された。

③ドキュメンテーションの手法による資料収集に関しては、研究費で購入したカメラによる写真撮影、動画撮影をもとに討議を行った。また、「保育の記録」への写真掲載により子どもの活動の様子を視覚的にとらえ、職員間の情報共有に役立てることができた。

④降園前のミーティングの時間（本園では、サークルタイムという名称）に、子どもが一日を振り返りながら感想や意見を発表する中で、集団で考える機会をつくることができた。

４　今後の課題

〇遊び込みのための環境設定として物的・人的両面から環境づくりを進め職員の意識も高まったが、組織的・系統的な取組みとしては道半ばであり、今後も引き続き研究を深めていく必要を感じている。

〇ミーティングについては、時間の確保が大きな課題である。日課の中でどの時間帯にどの程度位置付けるか試行錯誤する中で見極めていきたい。また、内容については、保育者はあくまでも話合いの進行役であり、子どもが主体的・双方向的に話し合い、意見交換する中で、考える時間としてさらに充実させる必要がある。

戻る

学校経営研究　＜02＞

研究主題　　**学校・地域　元気プロジェクト**

学校名　　**宇都宮市立石井小学校**

校　長　　**高橋　司**

１　研究目的

学校力を高めるために，地域との連携強化を図ることを目指すものである。また，このことにより，学校が元気になるとともに，地域にも活力を与え，地域をより元気にすることを目的とする。

２　研究内容

(1) 学校・地域会議の開催

年間３回行われている地区の各種団体長研修会の中で，学校と地域のつながりをより強めるための話合いの場を設けた。校長が，「地域の子供は，地域の力」という題で，講話を行い，その後意見交換を行った。結論として，子供を中心に据えた学校と地域のより強い連携を図り，学校も地域もより活力を得ようという共通理解が図られた。

(2) 学校の活性化と地域の人材活用

ペタンクの街石井と言われるくらい，地域では，ペタンクという競技が盛んである。これを受け，学校のクラブ活動の中で，ペタンククラブを設置し，地域のペタンク協会の方々の指導を受け，活動を開始した。４年生から６年生まで，計３０人の児童により活動がスタートし，充実した活動を行った。

クラブ活動の様子

ペタンク協会の方々も，毎回指導に訪れ，子供たちとの交流を楽しむ姿が頻繁に見られた。

また，婦人会の方々による校内の安全見守り隊の活動も，毎日午前と午後に行われ，校内の安全確保にお力をいただくとともに，子供たちと地域の方々の気持ちの良いあいさつが響き渡っている。

地域の方と児童との交流

(3)創立５０周年行事での地域との連携

式典などとともに，地域の歴史に詳しい方をお招きして，「石井地区の歴史を知ろう」という場を設定した。子供たちに地域の歴史を学ぶ機会を提供したいという地域の方の思いを活かす形となった。

３　研究成果

地域と積極的に連携することで，より児童の安全が守られ，児童の学びが深まった。そして地域の方々が生き生きと活動し，学校力とともに地域の活力も増したことが実感できた。

４　今後の課題

取組を見直しながら，無理なくお互いの活力を高められるものを模索し，持続可能なものとしていくことがあげられる。

戻る

学校経営研究　＜03＞

研究主題　学校教育における東京オリンピック・パラリンピックの啓発
およびカリキュラムマネジメントの視点による授業改善

学校名　　宇都宮市立陽東小学校

校　長　　手塚　浩

１　研究目的

日本での開催が予定される『オリンピック・パラリンピック』（以降「オリ・パラ」）には、国際理解や福祉など多様な教育的要素がある。そこで、「オリ・パラのたくさんの魅力と教育的要素を学習に取り入れることで、児童が興味関心を高め主体的な気持ちで授業に取り組むであろう」と仮説を立てた。

具体的には、オリ・パラの視点からカリキュラムマネジメントを行い、教科を横断した学習の設定や、学校行事を結び付けることでより魅力的で深い学びのある教育活動になることを目標とし研究を進めた。

２　研究内容

実際に、本校でオリ・パラと関連付けて行った活動から２例を紹介する。

①　総合的な学習×オリ・パラ

４年「宇都宮のよさを紹介しよう」
×「世界に目を向けよう」

宇都宮のよさの発信と、世界各地の良さについての理解を合わせたゴールを設定した。オリ・パラのスポーツの祭典を模し、食の祭典として世界各国の食文化と融合した「世界餃子祭り」を学習成果発表の場とした。児童は、それぞれの国のよさを知るとともに、あらためて宇都宮について考えることができた。

②　学校行事×オリ・パラ（事前研究から）

令和初の運動会×東京音頭２０２０

全校としてオリ・パラへの関心を高めるため、令和元年度の運動会より全校種目『東京音頭２０２０』を新しく取り入れた。和太鼓や浴衣による職員の演出や、日本独特の盆踊りのような動きを全校で楽しみながら、本校さらに地域の気運を高めることができた。公式の「東京２０２０みんなのスポーツフェスティバル」にも認定された。

３　研究成果

研究の成果は，以下のとおりである。

・授業内容充実による児童の主体性の向上
・学年を超えたカリキュラム設定の可能性
・校内での『東京五輪』啓発の成功
・職員内での教材研究及び授業提案による授業力向上・可能性の模索意欲の向上

４　今後の課題

令和元年度から継続させた活動の中で、児童の関心をより高めてきたが、感染症予防など諸条件が異なってきたことから、今後はさらに工夫した教育活動を行っていきたい。

戻る

学校経営研究　＜04＞

研究主題　学力向上を目指した学校体制での組織的・継続的な取り組み

学校名　　鹿沼市立南押原小学校

校　長　　近藤　明子

１　研究目的

本校は、個に寄り添った指導を心がけ、学習支援や小集団での補助的支援等により学力補充に努めている。しかし、学校全体での学力の定着が十分ではない。そこで、全ての児童の学力向上を目指し、学校全体で組織的・継続的な取組が必要であると考え、この研究主題を設定し、取り組むこととした。

２　研究内容

（１）基礎的・基本的な知識や技能の習得

① 基本的な生活習慣や学習習慣の確立

・「よい子の生活」の継続指導

・聞き方・話し方の継続指導

・学級経営・学びに向かう集団作り

・家庭学習の充実（強調週間の活用）

② 基礎学力の定着（朝の学習の活用）

・各種調査結果の分析・考察

・プリント学習・スキル学習

・読書・読み聞かせ

・ＭＩＭ活用による読みの指導

（２）教員の指導力の向上

① 学校課題の推進による授業改善

・研究授業及び授業研究会の実施

・要請訪問や各種訪問事業の活用

② 学び合いを高める授業実践

・理論研究・各種研修会等への参加

・学び合いのレベルの活用と改善

③ 学力向上に関する研修

・学力アッププロジェクトの活用

・学力向上改善プランの作成と活用

（３）個に応じた指導体制の整備と学力補充

① 朝の学習を活用した補助的支援

・アセスメントによる実態把握

・スマイル学習（小集団での指導）

② 一人一人のニーズに応じた指導・支援

・個別の指導計画の評価・見直し

・個別の教育支援計画の活用

・教員の複数配置による学習支援

３　研究成果

・教職員の経営参画意識を高めながら、同僚性の構築と指導力の向上を図れた。

・学業指導が充実し、意欲的に学びに向かう姿勢が身に付いてきた。

・朝の学習の有効活用が図れ、基礎基本の定着の一助となった。

・授業改善に向けて全校体制で取り組み、授業研究会が充実してきた。

・複式学級への対応も含めて、個に応じた指導体制の工夫・改善に取り組めた。

・教師の学力向上を意識した取組が、児童の学力向上へとつながってきた。

４　今後の課題

・学力向上には指導力向上が重要である。学校課題を推進し、授業改善に努める。

・複式学級への対応も含めて、一人一人の教育的ニーズに応じた指導・支援に向けて、指導者の確保が難しい。指導体制のさらなる工夫・改善が必要である。

戻る

学校経営研究　＜05＞

研究主題　　自尊感情と自己有用感を育む学校経営

学　　校　　鹿沼市立楡木小学校

校　　長　　永山　彦三郎

１　研究目的

「人生を豊かに送るための幸せの種＝自尊感情と自己有用感」の育成を学校全体で組織的、系統的、意図的に育むことを通して、学力も含めた本校４つの育てたい資質・能力（〇自分が集団の中で必要とされていると考えられる能力（自己有用感）〇長所や短所を含め、他にない自分を大切にしようとする能力（自尊感情）〇社会の中で生きて働く基礎的・基本的な知識・技能〇支え合い、聴き合い、学び合うことで獲得できる主体的な思考力・判断力・表現力）に迫る。

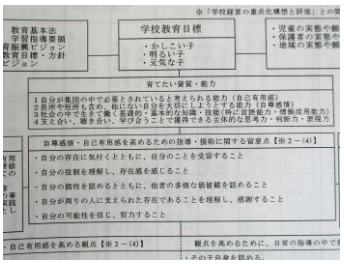
２　研究内容

「自尊感情・自己有用感は人生を幸せにする」このことを説いた「勇気づけの心理学」（岩井俊憲著　金子書房 2011）を拠り所に、児童のみならず教職員・保護者それぞれが自身の自尊感情・自己有用感を向上させることを学校経営の中核に据えれば、必ず「良い学校」になるのでは、の仮説のもとこの研究を開始した。

研究の流れは以下である。

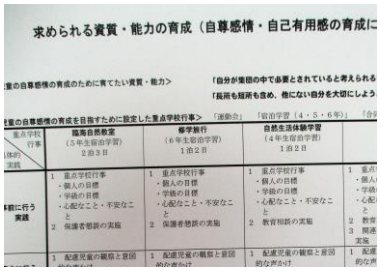
①理念の共有・プラン策定（P）

（ア）　自尊感情・自己有用感育成計画作成**【資料 1】**



（イ）　自尊感情を高める発達段階表作成**【資料 2】**

②研究実践（D）



（ア）　求められる資質・能力の育成を目指した重点学校行事表（自尊感情・自己有用感の育成に視点をあてて）作成**【資料 3】**・実践

（イ）　学級経営への落とし込み

（ウ）　スーパーバイザーを招聘しての授業研究会実施

（エ）　先進校視察（浜之郷小学校研究会参加）

③研究成果の確認（C）

（ア）　学校評価分析

（イ）　学力状況調査経年変化分析

④研究成果のまとめ（A）

３　研究成果

・全職員で育成計画等を作成したことで学校経営の理念の共有が図れた。

・発達段階における評価の観点を作成したことでそれぞれの学年で育てるべき内容が明らかになった。

・先進校を視察したことで、本校の目指すべき学校の雰囲気を肌で感じることができた。

４　今後の課題

現在はまだ育成計画を作り上げた段階で終わっているので、さらに実践を積み重ね、児童のみならず教職員、保護者の自尊感情・自己有用感の育成に努めていく。

自尊感情・自己有用感　育成計画【資料１】

※「学校経営の重点化構想と評価」との関連

日本国憲法　教育基本法
学校教育法　学習指導要領
とちぎの教育振興ビジョン
鹿沼市学校教育目標・方針
鹿沼市教育ビジョン

学校教育目標

・かしこい子
・明るい子
・元気な子

・児童の実態や願い
・保護者の実態や願い
・地域の実態や願い

育てたい資質・能力

１自分が集団の中で必要とされていると考えられる能力（自己有用感）
２長所や短所も含め、他にない自分を大切にしようとする能力（自尊感情）
３社会の中で生きて働く基礎的・基本的な知識・技能(特に言語能力・情報活用能力)
４支え合い、聴き合い、学び合うことで獲得できる主体的な思考力・判断力・表現力

教職員の研修

・自尊感情と自己有用についての基礎研修
・授業研究を通しての研修
・啓発の仕方の研修
・生かしたい児童の事研究を通しての実践
・出張報告を中心とし研修

自尊感情・自己有用感を高めるための指導・援助に関する留意点【※２－(4)】

・自分の存在に気付くとともに、自分のことを受容すること
・自分の役割を理解し、存在感を感じること
・自分の個性を認めるとともに、他者の多様な価値観を認めること
・自分が周りの人に支えられた存在であることを理解し、感謝すること
・自分の可能性を信じ、努力すること

保護者への啓発

・各種たより【学校/学年だより人権だより】
・授業参観
・学級懇談
・保護者懇談
・地域懇談
・ホームページ
・振り返りプレゼン
・チーム楡小ｷｬﾗｸﾀｰ
・チーム楡小ｽﾛｰｶﾞﾝ

自尊感情・自己有用感を高める観点【※２－(4)】	観点を高めるために、日常の指導の中で意識して取り組む内容
A　自分への気付き 自分ができたことや頑張ったこと、得意なこと、よさ等に気付くとともに、自分の行動や考え方を受け止め、自信をもつ。	・その子自身を認める。 ・自己決定させる。 ・ルールや目標をもたせる。
B　自分の役割 集団や様々な人間関係における自分の役割に気付くとともに、周りの人のために役立っていることを理解する。	・役立っていることを実感させる。 ・できる自分を意識させる。 ・周りの人からの肯定的な評価を受ける場を設定させる。
C　自分の個性と多様な価値観 自分の考え方や行動そのもののよさを理解するとともに、周りの人の多様な考え方を知り、受け止める。	・自分の考えを大切にさせる。 ・多様な価値観を理解させる。
D　他者とのかかわりと感謝 多様な集団の中で活動し、人とのかかわりを広げるとともに、周りの人の支えがあって、自分の活動が充実していることを理解し、感謝の気持ちをもつ。	・多様なかかわりを経験させる。 ・周りの人に支えられていることを実感させる。
E　自分の可能性 自分の行動の達成感を感じるとともに、失敗や困難は自分一人だけではないという安心感をもち、努力すればできるという自分への可能性をもつ。	・できたことを実感させる。 ・否定的な面に対する気持ちを切り替えさせる。 ・他者との同様性に気付かせる。

発達段階における各教科等の指導・支援において留意する内容【※２－(4)】

低学年	中学年	高学年
・自分の行動が役に立っていると思うとともに、周りの人から認められていると思える指導 ・相手のとのかかわりの中で、自分の存在に気付かせる指導	・自分が頑張ったことや満足したことが正しいと感じるとともに、得意なことがあると思える指導 ・小集団や学級内で自分ができることに気付かせる指導	・様々な考え方があるが、自分のよいところは、みんなにとって役に立っていると思うとともに、自分の力でできることがあると思える指導 ・集団の中での自分の役割や存在感を感じさせる指導

全教育活動を通して、自尊感情・自己有用感を育てる

基本的生活習慣の育成	一人一人の児童の理解	認め合い励まし合う集団作り	自己実現の機会の設定	地域との連携
◎温かな家族（基本的生活習慣の獲得） ◎あいさつ・かかと・時間（他者・自分に対する優しさの醸成） ◎健康教育（健康な精神は健康な肉体に宿る） ◎いのちの教育（自分のからだを大切にする）	◎教育相談 ◎心の健康診断ｱﾝｹｰﾄ ◎振り返りカード（各行事など） ◎共に遊ぶ（全校共遊・学年共遊・休み時間） ◎人権月間（いじめ防止月間） ◎家庭訪問 ◎Ｑ－Ｕ	◎なかよし班（異学年交流・縦割り班活動） ◎朝の会・帰りの会 ◎委員会活動 ◎クラブ活動 ◎登校班 ◎学びの共同体（学び合い・教え合い・支え合い）	◎集会活動（発表） ◎学習発表会 ◎始業式・終業式スピーチ ◎学期振り返りプレゼン ◎学級活動（自治的な学級会） ◎運動会 ◎小中合同音楽会（全校合唱）	◎「千葉省三に学ぶ」学習 ◎まち探検 ◎なかよし除草 ◎クリーン活動 ◎保育園との交流 ◎友遊館事業 ◎こども農園

チーム楡小　2018年　ハッピーリレー　2019年　スマイルリレー　2020年　サンキューリレー

自分を好きになり、人のためになり、そしてまた自分を好きになる

すべての教育活動は「子供のためになっているか」を判断基準とし、絶えず工夫・改善に努める

自尊感情を高める発達段階		評価の観点（ここを認める）			【資料2】
観点		項目	低学年	中学年	高学年
A自分への気付き	自分のことを認めることができる	認める	自分のことは自分でやったり、やろうと決めている	努力したり新しいことができたり工夫したりしている	以前よりよくなったり新しい考え方や行動が見られた
		自己決定させる	考えを表現したり活動を選んだりしている	得意なことを生かしたり活動を選んだりしている	今、何ができるかを考えたり確実に取り組んだりしている
		目標をもたせる	学校のきまりが守れる	学級のきまりが守れる	自分たちで決めたきまりが守れる
B自分の役割	自分が周りの人にとって役に立つことにより気付く	実感させる	友達のための活動を考え、実行している。	学級や友達のための活動を考え、実行している。	学級や学校のための活動を考え、実行している。
		気付かせる	家族や学級でできることを考え、実行できる。	学級のためにできることを考え、工夫して実行できる。	自分の考えに自信をもちリーダーとして小集団をまとめることができる。
		認める	グループ活動で互いのよさを認めることができる。	学級の活動で互いのよさを認めることができる。	様々な活動で互いのよさを認めることができる。
C自分の個性と多様な価値観	自分のよさや様々な事象は多様であることに気付く	自分の考えを大切にさせる	自分にはよいところがあることに気付くとともに自分の考えを大事にすることができる。	得意なことを発揮するとともに、考えや頑張ったこと等自分の方法を大事にする。	自分らしさを発揮するとともに異なる考えを大切にすることができる。
		考えや行動の多様性を理解させる	やりたいことや好きなことは一人一人違うことに気付く。	同じ事象に対して、様々な考えがあることに気付く。	同じ事象に対して、様々な考えがあること、それが集団にとってよいことに気付く。
D他者との関わり感謝	多様なかかわりの中で周りの人の大切さに気付く	多様な関わりを経験させる	学級の仲間と話し合ったり活動したりすることができる。	学級の仲間ときまりを決めて話し合ったり活動したりすることができる。	学級の仲間と考えをまとめたり協力して活動したりすることができる。
		周りに支えられていることを実感させる	友達がいることのよさに気付くことができる。	友達と協力することのよさに気付くことができる。	一人一人の活動は周りに支えられてうまくいっていることに気付くことができる。
E自分の可能性	達成感や努力をやり過ごす気持ちをもつ	達成感・成就感をもたせる	できるようになったこと、一生懸命やったことに気付く。	繰り返し努力してできるようになったことに気付く。	目標に向かって困難を乗り越えたことに気付く。
		失敗に負けないようにする	失敗してもくよくよせず取り組むことができる。	失敗を恐れず取り組むことができる。	失敗から学び、前向きに取り組むことができる。
		失敗は誰にでもあることに気付く	誰でも困難に立ち向かっていることに気付くことができる。	誰も一生懸命努力して取り組んでいることに気付く。	困難にぶつかることは誰にもあることに気付く。

求められる資質・能力の育成（自尊感情・自己有用感の育成に視点をあてて）を目指した重点学校行事【資料３】

鹿沼市立楡木小学校

＜児童の自尊感情の育成のために育てたい資質・能力＞　**「自分が集団の中で必要とされていると考えられる能力（自己有用感の育成）」**

「長所も短所も含め、他にない自分を大切にしようと考えられる能力（自尊感情の育成）」

＜児童の自尊感情の育成を目指すために設定した重点学校行事＞　「運動会」　「宿泊学習（４・５・６年）」　「合同音楽会」　「持久走大会」

重点学校行事 ＼ 具体的実践	**臨海自然教室** （５年生宿泊学習） ２泊３日	**修学旅行** （６年生宿泊学習） １泊２日	**自然生活体験学習** （４年生宿泊学習） １泊２日	**運動会** （全学年）	**合同音楽会** （全学年）	**持久走大会** （全学年）
事前に行う実践	１　重点学校行事 ・個人の目標 ・学級の目標 ・心配なこと・不安なこと ２　保護者懇談の実施	１　重点学校行事 ・個人の目標 ・学級の目標 ・心配なこと・不安なこと ２　保護者懇談の実施	１　重点学校行事 ・個人の目標 ・学級の目標 ・心配なこと・不安なこと ２　教育相談の実施	１　重点学校行事 ・個人の目標 ・学級の目標 ・心配なこと・不安なこと ２　教育相談の実施 ３　関連価値の道徳授業の実施	１　重点学校行事 ・個人の目標 ・学級の目標 ・心配なこと・不安なこと ２　保護者懇談の実施 ３　関連価値の道徳授業の実施	１　重点学校行事 ・個人の目標 ・学級の目標 ・心配なこと・不安なこと ２　保護者懇談の実施 ３　関連価値の道徳授業の実施
事中に行う実践	１　配慮児童の観察と意図的な声かけ ２　海を媒体とした体験と感情の共有	１　配慮児童の観察と意図的な声かけ ２　史跡や企業価値を媒体とした体験と感情の共有	１　配慮児童の観察と意図的な声かけ ２　自然を媒体とした体験と感情の共有	１　配慮児童の観察と意図的な声かけ ２　運動を媒体とした体験と感情の共有	１　配慮児童の観察と意図的な声かけ ２　音楽活動を媒体とした体験と感情の共有	１　配慮児童の観察と意図的な声かけ ２　運動を媒体とした体験と感情の共有
事後に行う実践	１　教育相談の実施 ２　Ｑ－Ｕの活用・分析 ３　他教科との関連（道徳・総合　他） ４　評価と改善に向けた方策の検討	１　教育相談の実施 ２　Ｑ－Ｕの活用・分析 ３　他教科との関連（道徳・総合　他） ４　評価と改善に向けた方策の検討	１　Ｑ－Ｕの活用・分析 ２　他教科との関連（道徳・総合　他） ３　評価と改善に向けた方策の検討	１　教育相談の実施 ２　保護者懇談の実施 ３　他教科との関連（道徳・総合　他） ４　評価と改善に向けた方策の検討	１　Ｑ－Ｕの活用・分析 ２　他教科との関連（道徳・総合　他） ３　評価と改善に向けた方策の検討	１　Ｑ－Ｕの活用・分析 ２　他教科との関連（道徳・総合　他） ３　評価と改善に向けた方策の検討

＜教育相談の実施＞「心配なこと・不安なこと」をもとに、教育相談を実施する。特に、運動会や持久走大会においては、「やり遂げることの大切さ」を理解させ、友だちから遅れてしまっても、思ったように競技ができなくても、やり遂げたことには素晴らしい価値があるということを理解させ、自尊感情・自己有用感の育成を図る。

＜保護者懇談の実施＞児童の自尊感情の育成には保護者の協力が欠かせない。特に、自尊感情・自己有用感の育成には「体験と感情の共有…同じ体験により同じ感情をもつ」が重要であることを理解していただき、協力を依頼する。

＜関連価値の道徳授業の実施＞自尊感情・自己有用感を育成するために、長所も短所も含めて自分を大切にしようとする態度を育成する。

＜Ｑ－Ｕの活用・分析＞自尊感情・自己有用感の育成を評価する一つの視点として、Ｑ－Ｕを活用する。学級の中で、自分が認められているか否かの分析に注目し、教育相談等に生かしていく。

戻る

学校経営研究　＜06＞

研究主題　　小中一貫教育校における、やる気と自信を育む児童生徒の育成
～地域と共にある学校づくりを目指し、
地域との関わりを強化した教育課程の工夫と改善～

学校名　　日光市立三依小中学校
校　長　　福　田　　稔

１　研究目的

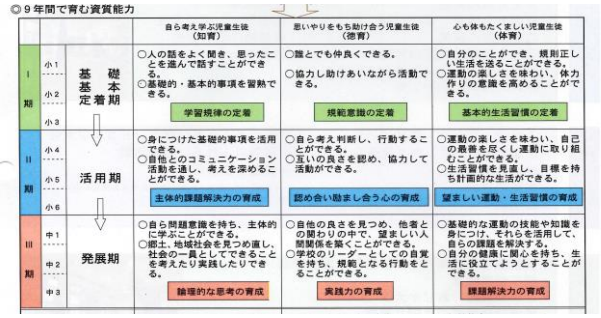
極小規模校の児童生徒が地域の力を活用し、やる気と自信を育んでいく。また、児童生徒が多様な人々と協働して学んでいく活動を通し、生き生きと主体的に活動する資質・能力を育成し、地域と共にある学校づくりを目指す。

２　研究内容

(１)小中一貫教育

義務教育９年間を見通した発達の段階ごとの育成すべき資質・能力を明確にし、個の実態を詳細に分析して指導の手立てを構想した。そして少人数であることのよさである、人間関係の結びつきの強さを生かし、小学校と中学校が一貫した系統性・連続性のある教育活動を計画・実践した。

【９年間で育む資質・能力学習】



【中学校教員の小学校への乗り入れ授業】

(２)伝統文化の継承

地域には、関白流獅子舞や盆踊りに由来する返し音頭等の伝統芸能が引き継がれている。それら地域の伝統芸能をそれぞれの保存会の方々から指導を受け、運動会での発表に向け、練習した。特に今年度は、返し音頭の歌詞を児童生徒全員で作成し、自分たちの言葉で三依のよさを歌に込めた。

【運動会で地域の方と一緒に踊る返し音頭】

【獅子舞の練習】

(３)地域素材を生かした学習活動

総合的な学習の時間や社会科の学習に生かせる地域素材を洗い出し、学習活動に取り入れた。学校近くにある中の棒遺跡の見学では、本物の矢じりや土器を手にし、古代の人がこの地に住んでいたことが実感できた。

３　研究成果

○小中の教員が同じ課題を共有し、それぞれの情報を交換しながら研修することで、小中のつながりを考え指導するようになった。

○昔から続く活動を子どもたちが体験する、成り立ちなどを伺うという体験を通し、三依の伝統を自然に引き継ぐという意欲を高め、学校が地域の伝統を継承する場となった。

○地域学習を進める中で、より深い地域理解が進み、地域への誇りが芽生えてきた。

４　今後の課題

地域との関わりや有効な地域素材を、教育活動に取り入れ、今後は、学習ボランティアなど日常の教育活動の中での地域とのつながりを構築していきたい。

戻る

学校経営研究　＜07＞

研究主題　　**学校を核としたコミュニティ・スクールの推進**

～組織マネジメントを生かした計画づくりに焦点を当てて～

学校名　　**栃木市立国府南小学校**

校　長　　**塩田　裕子**

１　研究目的

教育目標の目指す具体的な姿を学校と地域が共有し、実現に向けた中期的な戦略づくりと協同した実践を進めることを通して、地域とともにある学校づくりの推進を図る。

２　研究内容

（１）事前の打合せと拡大会議

拡大会議前に学校運営協議会委員代表・コーディネーター・学校長とで会議の方向性や流れを複数回打合せをし、内容を共有した上で全体的な拡大会議を２回実施した。

【事前打合せ】

【拡大会議】

（２）計画づくり委員会

拡大会議を受けて、３つの教育目標ごとに部会を作り、それぞれの部会に分かれて「対象とする既存の事業」「具体的な展開案」「役割分担」について４回協議を重ね、教育目標具体化表を作成した。

【計画づくり委員会】

（３）実践

①オープンスクール準備では、当日実施する「校庭アート」で使用する物の下準備を有志で行ったり、オープンスクールが雨天の場合の代替案の役割分担をした。

②オープンスクール当日は、児童や保護者、ボランティアとともに活動した。

③ふるさと学習

「しもつかれづくり」では、地場産の材料収集や児童のおにおろし体験のサポートを実施した。

【おにおろし体験】

３　研究成果

○地域の人的・物的資源の洗い出しから教育目標の目指す具体的な姿を全員で考え合ったことで、改めて本校の強みやよさを再認識でき、今後の取組への原動力になった。

○世代を超えた協同実践により、新たな視点を共有でき、学校を核としたコミュニティへの意識改革が図れ、地域の人々の学校・地域への思いの凝集性が高まるとともに、自主的な活動が促進された。

○３年後の児童や学校の姿を検討する過程で、５年後・１０年後の地域の在り方へも思いを馳せることができた。

４　今後の課題

○各部会のリーダーを中心とする活動の実施とＰＤＣＡのサイクルでの検証を通して、次年度の方向性の再検討をする。

○継続した取組を重ね、学校を核としたコミュニティ・スクールの充実を図る。

戻る

学校経営研究　＜08＞

研究主題　　「居がいのある学校」を目指して

～　児童を認める活動・児童の意欲を高める活動の実践をとおして　～

学校名　　那須町立東陽小学校

校　長　　深谷　雅明

１　研究目的

学校生活に関わる様々な場面において、児童の良いところを認める活動を実践したり表彰したりすることにより、児童の自己有用感や意欲を高め、居がいのある学校づくりを目指す。

２　研究内容

①　児童を認める活動を実施する。

毎月実施するものとしては、「清掃ＭＶＰ」、「あいさつＭＶＰ」、「自主学習ＭＶＰ」がある。担任や担当教員から選出された児童は、各ＭＶＰのバッジを胸に付けるとともに、学校だよりや学校の facebook ページで紹介するとともに、校内に受賞者名を掲示した。

３つのＭＶＰを獲得した児童は「トリプルＭＶＰ」として校内数カ所に写真入りで掲示したり、学校だよりでも写真入りで掲載したりするなど、大々的に表彰・紹介した。子供たちは皆、「トリプルＭＶＰ」目指して、生活を頑張る姿を普段に見るようになってきた。

トリプルMVPの掲示

随時実施や半期毎実施の「腰立マスター」、「東陽きらり」、「模範行動賞」等については、集会で呼びかけて児童への啓発を図ったり、学校だより・facebook ページに掲載したりして、表彰・紹介をした。

②　児童の意欲を高める活動を実施する。

児童の意欲を高める活動としては、学習指導部主催の「全校計算大会」、校長と担任が連携した「かけ算九九検定」、「都道府県名テスト」、「歴史年表テスト」を実施した。合格証や賞状の交付、合格者等の校内掲示などを行うことにより、学習面で全校に認められる機会を作ったことにより、児童の学習に対する意欲が増してきた。特に、全校計算大会では、中学年児童の優勝者が出てくるなど、一人一人の伸びを認めるだけでなく、頑張れば上級生にも勝てることが出てきて大いに盛り上がった。

全校計算大会

３　研究成果

月毎の清掃ＭＶＰ・あいさつＭＶＰ・自主学習ＭＶＰ、全校計算大会実施と表彰・かけ算九九検定、そして立腰マスター・ＴＯＹＯ運動検定の実施をとおして、学習･生活･運動面等、様々な面から多くの児童が認められるようになった。それにより、児童の自己有用感や自己肯定感が増し、学校に居がいを感じられる児童が増えてきた。

４　今後の課題

児童を認める活動を実践することにより、学校に居がいを感じる児童が多くなったが、どの活動でも表彰等されない一部の児童に対して、どのように意欲をもたせるかが課題である。

戻る

学校経営研究　＜09＞

研究主題　**地域と共に歩み続ける学校を目指し**
～地域の財産「自然・文化・人材」を活用した体験活動をとおして『郷土愛』を育む～

学校名　**佐野市立吾妻小学校**

校　長　**中村　徳幸（現　足利市立協和中学校長）**

１　研究目的

吾妻小学校では，昨年度より『N・K・G』（日本一 きれいな 学校にしよう！）を合言葉に校内の美化活動を進めている。「愛校心」を育むためにスタートさせた『N・K・G』は，保護者と地域の協力により，学校図書館を「吾妻小の宝物」として蘇らせることができた。これに感化された子どもたちは，毎日の清掃，花壇の手入れ，物の扱い方などが丁寧になり，「愛校心」が着実に育ってきている。まさに『環境が人を育てる』である。

今年度は，合言葉を『地域と共に歩み続ける学校』とし，実践していく。地域の財産「自然・文化・人材」を活用した体験活動を数多く取り入れることで，「愛校心」に加え「郷土愛」も育むことができるのではないかと考えた。

【 整備された学校図書館 】

２　研究内容

『吾妻地区ふれあい大運動会』で心を一つに

【 総踊り：みんなで踊ろう「さのまる音頭」】

各教科と生活科・総合的な学習の時間を連携させながら，テーマに沿って活動を実施

(1) １・２年 幼保小連携 保育園年長児と共に実施した「さつまいもの栽培」を通して，『思いやる心』を育む。

【 園児と共に「いも掘り」を体験 】

(2) ３年生 地域 地域探訪を通して，『地域の文化・歴史』を学ぶ。

【 神社本殿で「子ども神楽」を体験 】

(1) ４年生 福祉 オリパラ教育を含む福祉体験活動を通して，『奉仕の心』を育む。

【 親子で「シッティングバレーボール」を体験 】

(2) ５年生 環境 米づくりを通して，『食の大切さ』について考える。

【 学校で育てた苗で「田植え」を体験 】

(3) ６年生 職業 農業体験やキッザニア東京での職業体験に加え「働く人に学ぶ会」の開催を通して，『職業観』を育む。

【 地域の特産物「桃」の袋がけを体験 】

３　研究成果

どの学年も実体験を伴った活動を中心に施したことで，子どもたちの学びを深めることができた。1 年間の体験活動を終了した子どもたちの感想は以下のとおりである。

・１，２年生「保育園の年長さんといっしょにさつまいものことをたくさん知ることができて，とっても楽しかった。」
・３年生「地域のことを学べて，地域が好きになった。」
・４年生「障害のある方の大変さやそれを乗り越える勇気を学べた。」
・５年生「米作りをとおして，お米一粒の大切さを学んだ。」
・６年生「職業についての学習を通して，自分の将来が楽しみになった。」

という喜びや達成感に満ちた感想を聞くことができた。

また，人との関わりいう点での学びが大きい。１・２年生と保育園年長さんとの交流では，お兄さん・お姉さんとしての振る舞いができ，その他の学年でも，地域の方々との触れ合いの中で接し方を学ぶなど，人との関わりの中で大きく成長できた部分も成果として挙げられる。

さらに，１１月に開催された学習発表会『桃梨祭』において，地域の皆様を招待し，群読，合唱，劇，そしてダンスで「地域への感謝」を表現できたことは，児童に「郷土愛」を育むうえで大きな効果を上げたと考えられる。

４　今後の課題

吾妻小学校は小規模校であるため，地域の理解・支援なくしては，教育活動を実践することは不可能である。今年度の取組『地域と共に歩み続ける学校』は，今後益々児童数が減少する吾妻小の教育環境を維持し発展させていくために，なくてはならない大切な視点である。

今年度と同様に，多くの体験活動を推進するためには，地域との連絡・調整に多くの労力を費やすことは避けられないが，数年間実施することでマニュアル化が進み，対応しやすくなる。子どもたちと地域の未来のために，全教職員が一丸となって，この取組を継続していく必要がある。

戻る

学校経営研究　＜10＞

研究主題　　義務教育９年間を見通した系統的、連続性のある教育内容・指導法の工夫
～分離型小中連携を通して～

学校名　　足利市立富田小学校

校　長　　佐々井　信子

１　研究目的

富田の教育を『大小郷育』とし、「ふるさと富田を愛する心」「上級生から下級生へ教え、自分たちで高め合う力」「友達同士の学び合い」の3点を柱として、足利市のモデル校として中学校区教育を推進する。

２　研究内容

(1) 創意ある学校運営の推進

○系統性・連続性に配慮した分離型小中一貫教育の推進
・小中合同による目指す児童像の見直しと具現化「縦の繋がり」
・教職員の特性を生かし、小内連携を強化した学校体制づくり「横の繋がり」
・足利市教育委員会指定の中学校区教育モデル校としての地域発信

(2) 教職員研修の充実

○中学校区教育として小中連携・協同した実践的指導力の向上
・中学教諭によるプログラミング研修
・小中合同の人権教育研修及び合同学習指導研修
・学力向上プランの分析結果の共有
・夏休みの研修に教員の地域探訪
○小中合同研究推進会議

(3) 学習指導の充実

○小中学校９年間の学習の円滑な接続を踏まえた指導内容・指導方法の研究
・研究授業・授業研究会の参加
・５・６年音楽授業の乗り入れ指導
・外国語授業の乗り入れ指導、ALT活用
・教育講演会合同開催
・『大小郷育』を推進するための魅力ある体験活動（地域ボランティアの活用）

(4) 特別活動の充実

○地域との連携
・たてわり大小山登山
・運動会における中学生ボランティアの活用

(5) 道徳教育・情操教育の充実

○心を育てる活動の充実・『大小郷育』の広報と実践

(6) 児童指導の充実

○中学校区教育推進のための「学習・生活のやくそく」についての見直し

(7) 体育指導の充実と保健・安全指導の徹底

○小中合同の実践的な引渡し訓練

(8) 特別支援教育の充実

○特別な支援が必要な児童の共通理解

３　研究成果

・学習指導法が改善できた。
・小中同時に家庭学習強化週間を実施した。
・小中で意見交換しながら9か年を見通して学習･生活のやくそくを作成した。卒業生保護者から「コロナによる臨時休校があったが、安心して進学できているようだ。」との話があった。
・災害時等の共通対応をはじめとする緊急時連絡体制の強化が図れた。
・学校評議員を小中共通で合同開催することで、地域との連携が深まった。
・小中合同で、授業・研究授業・研修等を行うことで交流が深まった。

中学校合唱祭に6年生が参加。合同合唱。R元.11

４　今後の課題

さらに連携を深めて、学習指導法改善に努め、9か年を通した学力向上につなげたい。

戻る

学校経営研究　<11>

研究主題　　**右脳を鍛える　～活動意欲の喚起を目指して～**

学校名　　**日光市立足尾中学校**

校　長　　**原口　真一**

１　研究目的

今の日本の教育では、「主体的・対話的で深い学び」を進めていくための「問いのある発問」が求められている。しかし、そのためには、個々の生徒に「問いを持つ感性」が培われていなければ、砂漠に水をまくようなことにもなりかねない。この場合の「感性」とは何か。

また、所謂「AI の影響で消えてしまう職業」に着目すると、これまで「ホワイトカラー」と呼ばわれてきた職種が多いことがわかり、突き詰めれば左脳領域の思考が中心の職業が多いことが見えてくる。ならば、今後の社会で生き抜く力は、右脳による思考力ではないかと考えた。更に、前出の「問いを持てる感性」を重ねてみると、右脳の存在が浮き出てきた。

そこで、本校では「右脳を鍛える」を目標に様々な企画を考えてみた。しかし、これまでの日本の教育には、左脳を鍛えるノウハウは多々組み込まれているが、右脳を鍛えるノウハウには不確かな部分が多く、判然としない。

そこで、私なりに導き出したのが、「答えのないことを考える（感じる）感性を耕す」であり、そのためには「一流の人間との濃密な関わりを通して、コミュニケーションに裏付けられた感動体験を重ねる」ことであった。加えて「感性に直接働きかける芸能や芸術との出会いや体験」も、右脳刺激には不可欠であると考えた。特に、小規模校の生徒は、日常生活を普通に過ごしているだけでは、「本質的に価値のある人や物」と出会う確率は都市部に住む生徒より相対的に不利である。一方、機会さえあれば、少人数であることは、関わりの濃密さで有利に働く。意図的に仕掛ける意義は大きい。

２　研究内容

①身体活動コミュニケーション活動

講師：妻木律子氏（ダンサー）

言語ではなく、身体活動による他者とのコミュニケーション。身体の解放が心の解放につながり、ひいては、左脳的思考を越えて右脳的感性を体感できる機会を目指した。

②箏曲合奏

講師：池田律子（箏曲演奏家）

音楽科器楽では年間を通して箏を選択し、地域や学校の行事における発表体験とも関連づけることで、感性の深化を目指した。

③芸術書道作品の制作　指導者：校長

校舎内の一区画に道具を常設しておき、条幅作品の制作に取り組むことで、技術に感性が入り込んでくる書作を継続体験した。

④味覚講座

講師：品川明氏（学習院女子大学教授）

「五感で味わう食育」として、一貫したプログラムで食材と深く向き合っての味覚体験講座を実践。感性に訴えた食育を行った。

⑤その他「料理人の講師による調理実習」等

３　研究成果

様々な体験を重ねることで、何事にも興味をもって取り組む姿勢が向上してきた。

４　今後の課題

令和元年度に蓄積してきた基礎を踏まえ、今年度は更に深化を図る計画も出来ていたが、感染症に関わる諸事で、多くが足踏み状態になってしまった。教科学習の遅れを取り戻すと並行して、今後の方向性を模索中である。

戻る

学校経営研究　＜12＞

研究主題　　持続可能な地域社会を北陵生の手で

学校名　　栃木県立真岡北陵高等学校

校　長　　押久保　徹

１　研究目的

本校がある芳賀地区の人口は少子高齢化により 2045 年には現在と比較して 2/3 になると推計される。このため地域の担い手の確保・育成や持続可能な地域社会の構築が課題とされる。 また、新しい学習指導要領では「持続可能な開発のための教育」が基盤理念となっており教育課程全体で持続可能な社会の構築に向けて教育活動の実践が求められている。

そこで地域活動を通して、地域人材の生きる力を育むことが重要であると考えた。 本研究では、「地域の課題を考える」をテーマに学習活動を行い、教育を通じて持続可能な未来、社会を構築することを目指し ESD にもとづいた実践を行った。これらの実践から思考力・判断力・表現力や課題解決能力を育成するとともに持続可能な社会の形成者としての資質を持つ人材の育成を目指した。

２　研究内容

① SDGs 講演会の実施(11/6)

収穫祭を実施にあわせ収穫祭前に SDGs に関する講話を実施した。持続可能な開発目標に向けた本校の取り組みや、食品ロスをなくす大切さについて理解した。

② グローバルＧＡＰ認証取得(11/18)

令和元年度生産した梨とコシヒカリを対象に、食品の安全性などを確保するための国際的な農業生産工程管理規格である「グローバルＧＡＰ」の認証を取得した。栽培した農作物は美味しいだけでなく、「安全である」という証明を受けた。

③ 廃棄柿を使用した特産品開発(10/27)

茂木町の河井上柿生産組合と協力して廃棄される柿を使った地域特産品の開発を目指した。同組合との意見交換や試食会を重ね、生地に柿ペーストを練り込んだパウンドケーキを製作し「道の駅もてぎ」にて一般の方に試食会を行なった。当日 200 個用意し、たくさんのお客様に来ていただきアンケートにもお答えしていただいた。柿の風味があり、とても美味しく仕上がっていると好評であった。

④ ユネスコスクールへの加盟申請(12/1)

学校の中に活動を留めるのではなく、生徒・教職員・保護者・地域・企業などに活動を広げ、学びを深化させ教育の質の向上につなげるためユネスコスクールへの加盟申請を行った。

⑤避難所運営体験炊出し訓練(2/24)

初めて顔を合わせる生徒や住民が炊出しを実施するということがどんなに難しいか、そしてコミュニケーションが大切かということを痛感した。

３　研究成果

本県高校生の県内大学・短大への進学率は、26%となっており、多くの高校生が県外に流出している。高校が結果として人材流出装置になっている。高校生にとって魅力のある雇用の場の充実など、若者を呼び戻す以前に若者を流出させない抑止策が早急に必要である。本校は普通科高校に比して進学率は高くはないが、高校時から地域活動に取り組み、異世代連携の形で地域課題の解決に挑んだ取り組みは、地方の担い手育成が進む一例ととらえることができる。

４　今後の課題

持続可能なまちづくりが進展するために「地学連携協定の実現」をあげられる。高校側では生徒の校外活動には責任の所在を明確にすると共に引率を必要とする。地域側では一事業ごとに、学校との協議や文書の提出、経費に関する確認等煩雑極まる。その結果、疎遠になる。これを解決する方法に「地域と学校の連携協定」つまり、地学連携の必要性を取り上げたい。